

平成24年度 学習院大学史料館特別展
学習院大学文学部教育学科開設準備室共催

近代日本の学びの風景

学校文化の源流

会場：学習院大学目白キャンパス 北2号館1階 学習院大学史料館展示室
会期：平成24年10月1日（月）～12月1日（土）



「少年少女 小学教科双六」部分（学習院大学史料館寄託 小西四郎収集双六資料）

編集・発行
学習院大学史料館
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
03-3986-0221（内線6569）
<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>
平成24年10月1日

近代日本の 学びの風景

学校文化の源流

平成24年度 学習院大学史料館特別展
学習院大学文学部
教育学科
開設準備室共催



日本の近代化において「教育」が1つの重要な要素であったことは、今さら言うまでもないことかもしれません。明治以降に少しずつ形づくられていった「学校の風景」は、現在もその基本形をさほど変えずに私たちの記憶の中にあり、また国力の礎になってきたのでしょう。

明治10年(1877)に神田錦町に開校した学習院は、幾たびかの災害や戦災をこえ、校地の変遷を経て今もなお、初等科、中高等科、女子中高等科、大学をはじめ、学習院アーカイブズや当館などにそれぞれ古い教材類や教具、写真などが遺されています。これらの明治・大正期の教育の基礎となった資料にスポットをあて、歴史的な考察を加えるべき時期に来ているのではないかと考えておりました。

折しも、次年度に開設が予定されております文学部教育学科の準備室と共催し、この度「近代日本の学びの風景—学校文化の源流—」と題する展覧会を開催することとなりました。本展では、主に初等教育に視点を絞ってその一端を御紹介し、近代日本の教育について改めて考える機会にしたいと存じます。

最後になりましたが、本展を開催するにあたりご協力下さいました資料所蔵者や関係諸機関の皆さま、本図録の作成に多大なるご尽力を賜りました「学校文化史研究会」の皆さまに篤く御礼申し上げます。

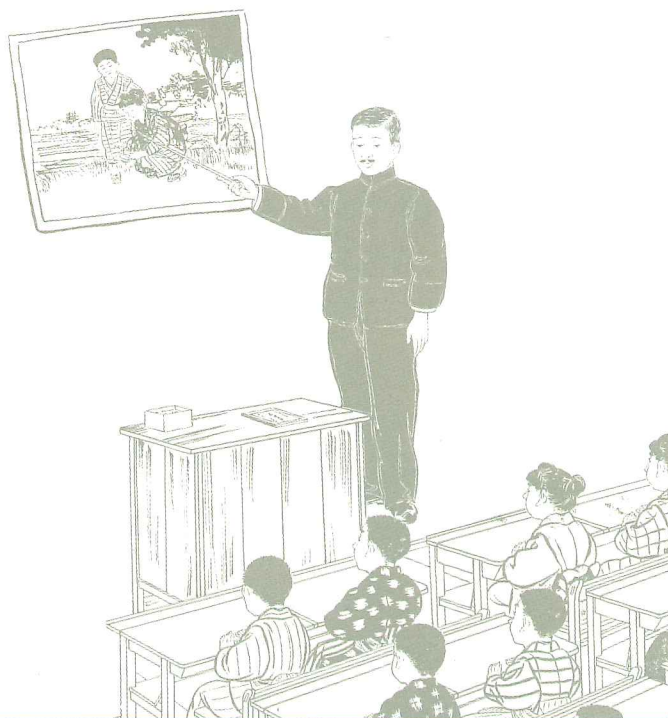
平成24年10月1日
学習院大学史料館

はじめに

私たちのすべてが、心の中に「学びの風景」を持っている。それは、「学級」という集団のなかの風景であったり、教科ごとに異なる様々な学習の体験であったりするだろう。むろん、教科の授業だけではない。運動会や遠足、学芸会や修学旅行、夏休みや部活動といった場面も、固有の意味をもつ重要な学びの風景であった。それらの風景は、近代日本においてどのように生み出され、定着し、あるいは変化していったのだろうか、そのことを、多様な角度から論証し、描き出してみること、それがこの展覧会の目指すところである。

そして、それらの風景の最も土台となってきたのは、小学校という場での教員と子どもたちの学びの営みである。次年度から学習院大学文学部に教育学科が誕生し(認可申請中)、小学校教員の養成を行っていくことは、また新たな学びの風景を創り出す機縁になっていくに違いない。この度、学習院大学史料館との共催展示をおこなう機会を得、展覧会を通してこのような「学校文化」の源流の一端を伝えられれば、幸いである。

学習院大学教授
学習院大学文学部教育学科開設準備委員
齊藤利彦



1-1 学校の風景 [寺子屋から教室へ]



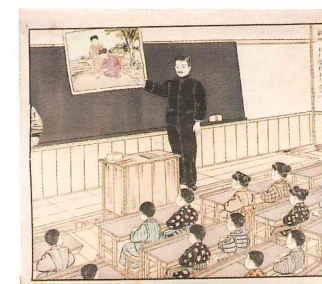
● 東京帝国大学文科大学史料編纂部編 歴史科教用参考掛図
寺子屋の図
明治45年
学習院初等科蔵



● 「少年少女 小学教科双六」
明治40年1月1日発行
学習院大学史料館寄託 小西四郎収集双六資料



● 学習院初等学科教室
(「皇太子殿下御卒業奉祝記念写真帖 学習院初等学科」より)
大正3年
学習院大学史料館蔵 高松宮家資料



● 小学校掛図
昭和初期
学習院大学史料館蔵



● 学習院初等学科 机腰掛
明治期
学習院初等科蔵

明治維新を経て、日本の新政府は近代化を遂げるために、教育を1つの重要な柱とした。その手始めに明治5年(1872)、フランスの制度に倣った「学制」を發布、日本全国を学区に分け、小学校、中学校、大学校をおき、それぞれの修業年齢を定めた。

学校では、学年ごとに教室を分け、1人の教師に対して数十人の生徒が対面して授業を受ける「一斉教授法」が導入され、時間ごとに異なる教科が割りふられる「時間割」が用いられた。一斉教授を行う上で、各教室には「黒板」が置かれ、教科書の他に「掛図」や「実物教材」など、生徒の感覚に直接うたえる視覚教材の使用が奨励された。こうした近代日本の学校の制度や教授方法は、欧米のそれを規範とし、その後、改正を繰り返しつつも、基本的なスタイルは現在まで続いている。

つまり、近代の学校風景は、江戸時代の寺子屋風景—様々な年齢の子供達が一室に集まり、1人ないしは何人かの師匠の下、読み書き、算盤などをそれぞれ学習する—を一変させたのである。しかし明治以降の日本が、欧米のスタイルに則った教育制度を吸収し、新たな教育方法に順応できた背景には、江戸期の藩校、私塾、寺子屋により、既に全国規模で培われていた教育の地盤が大きかったことは言うまでもない。

さらに政府が奨励した教科書や教材類の製作をいとも簡単にこなせた背景にも、江戸時代以来の技術の備えがあった。例えば、明治期の「掛図」に見られる多色刷木版画は、それまで錦絵製作に励んでいた絵師、彫師、摺師の腕があり、「標本」や「模型」製作もまた優れた職人の手があった。すなわち、日本の近代教育は、江戸時代に培われた基盤の上に、欧米の制度や方法が導入され、大きな発展を遂げることができたといえるのである。(鎌田純子)

ランドセル

小学生の通学鞆
といえ「ランドセル」が思い浮かぶが、ランドセルを最初に通学鞆として採用したのは学習院であった。ランドセルは元々は兵士が物品を入れて背負う背囊(はいのう)のことで、オランダ語の「ランセル」(ransel=背負い鞆)が転訛したものである。学習院では、明治18年(1885)5月より「通学途上必ス背囊ヲ負フヘシ」と学生心得に定められ、生徒休憩所には「生徒携帯之書物入、行々欧州尚武国之风ニ倣ヒ歩兵用ラントセルノ形ニ一定致度候間 新ニ調製ノ者ハ成ルヘク本院歩兵科用ラントセルニ改造相成候事。但シ製造望ノ者ハ本院へ申出候ハ、調製可申付候 代価凡ソ二円六拾銭位」と掲示された(「明治18年教務課日記」)。

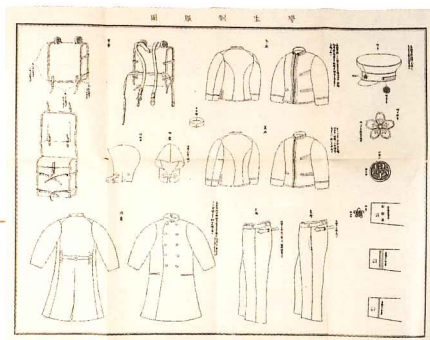
(長佐古美奈子)

● 学習院ランドセル
学習院初等科蔵

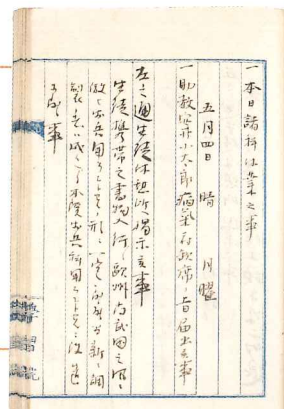


● 同(裏)

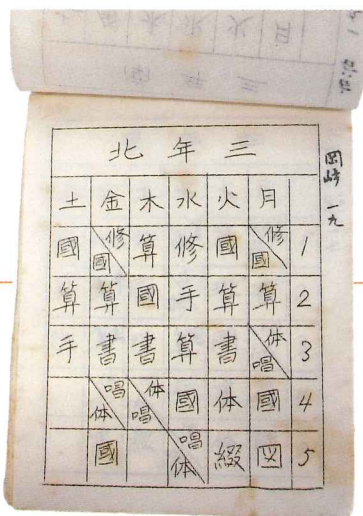
● 同(内部)



● 学生制服図(「学習院一覽」より)
明治31~32年
学習院アーカイブズ蔵



● 教務課日記 明治十八年
明治18年
学習院アーカイブズ蔵



● 鐘
学習院初等科蔵



● 時間割表
大正12年
学習院初等科蔵

時間割

時間割は各曜日・各校時にそれぞれの教科を割り振ったものである。文部省は明治5年(1872)に「小学教則」を制定した。そのなかでは、授業時間を「一日五字一周三十字ノ課程 日曜日ヲ除ク」とし、たとえば「綴字(かなづかひ)」という教科は「一周六字即一日一字」とされていた。しかし、実情は地域ごとに異なっていた。授業時間は40分や100分など様々で、また学校に時計がなければ正確に時間も計れなかった。村々の小学校に少なくとも1個の時計が設置されるのは、国産の安い時計が作られ始めた日露戦争前後と推測される。また、授業の開始および終わりには、太鼓や鐘の音で時刻を知らせるようになった。このようにして、日本全国の学校の時間が少しずつ一定になっていった。(稲井智義)

1-2 学校の風景

[授業と教材]

● 尋常小学校教科書
大正~昭和前期
個人蔵



教科書

明治5年(1872)に「学制」が發布されると同時に、「小学教則」のなかで標準教科書が指示され、文部省と師範学校の指導の下、教科書が全国に普及していった。明治12年の「教育令」の公布以後は、復古思潮の影響で、「修身」が重視されると同時に、教科書の統制も強化されるようになる。さらに、明治14年の「小學校教則綱領」により、学年代階別の教科書が登場した。しかしこの時期、教科書が全ての子供達の手に渡るには至らなかった。

国定教科書の登場は、「小學校ノ教科用図書ハ文部省ニ於テ著作権ヲ有スルモノタルヘシ」と規定された、明治36年の小学校令改正に遡ることができ、翌37年から修身・国語・歴史・地理の国定教科書が初めて使用された。国定制の実施により、教科書を通じた国民思想の統一が容易になったと考えられている。

(歌川光一)

掛け図

近代日本の学校教育は、一人の教師に対して数十人の生徒が対面する、いわゆる「一斉教授法」が採用された。これにあたり、教室に黒板や掛図が新たな教具として導入された。大正期の学習院初等学科の教室写真を見ると、黒板横に掛図掛けが立てられている。また同校の「地理歴史標本室」の写真からは、たくさんの掛図が教材として用意されていた様子もみられる。掛図保管のための掛図室なる部屋を有していた学校もあった。文部省の方針の下、掛図は教科書以外の視覚教材として教科ごとに多彩な図が製作され、明治・大正期に全国の学校に普及した。掛図自体の形態も数種あり、掛軸、台紙貼、画帖などがみられる。

(鎌田純子)

● 国語読本 巻四
昭和3年
個人蔵

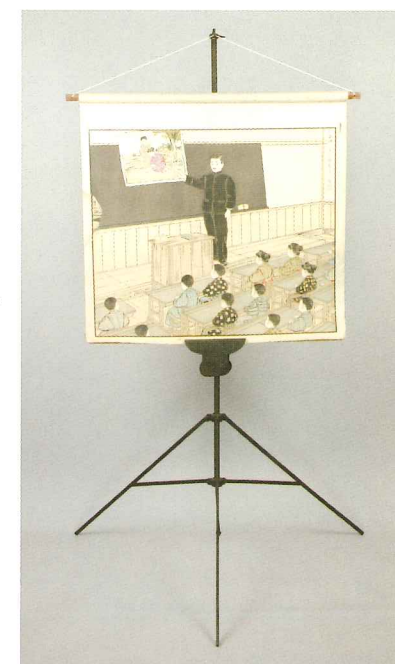
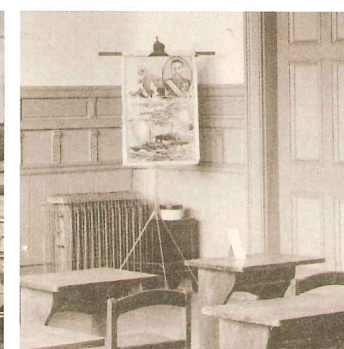


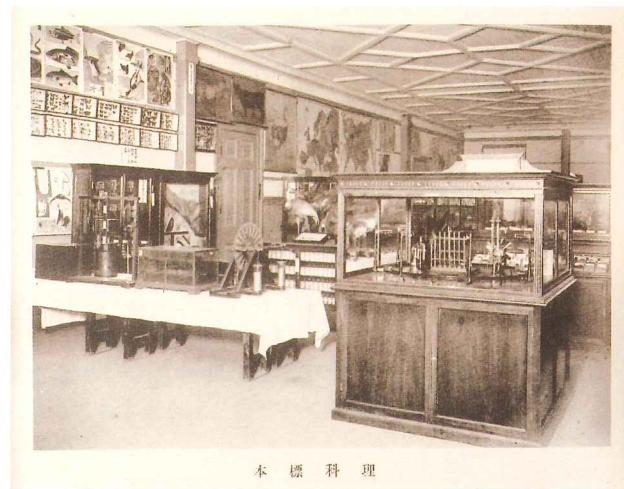
● 東京帝国大学文科大学史料編纂掛
歴史科教用参考掛図(源頼朝画像)
明治42年
学習院初等科蔵

● 掛図・掛図掛け
学習院大学史料館蔵



● 左・学習院初等学科地理歴史標本室 右・学習院初等学科教室の掛図と掛図掛け
(「皇太子殿下御卒業奉祝記念写真帖 学習院初等学科」より)／大正3年／学習院大学史料館蔵 高松宮家資料





本 標 科 理

● 学習院初等学科理科標本室
 (「皇太子殿下御卒業奉祝記念写真帖 学習院初等学科」より)
 大正3年
 学習院大学史料館蔵 高松宮家資料

実物教材

掛図とともに視覚教材として普及したのが実物教授を目的とする教材類である。標本や模型、実物そのものなどその形態は様々で、どれも生徒達の感覚に直接響くものである。こうした教育方法は、欧米の初等教育に多大な影響を与えたスイスの教育者ペスタロッチ(1746～1827)の教育思想に端を発し、近代日本の学校教育で奨励された。例えば「樺太物産標本」(学習院初等科蔵)は、樺太の産業をささえたパルプの原材料である木材、名産である大麦やライ麦などの農産物、干し鰯やアザラシの毛皮などが1つの箱に収められている。こうした教材を製作する、島津製作所や土屋商店など専門の業者もあった。興味深いのは、日本や諸外国各地の物産や産品を集める傾向は、当該期の「博覧会」の出展品にも通じており、近代化の礎となった殖産工業を初等教育で教え込んでいた事実を垣間見ることができる。(鎌田純子)



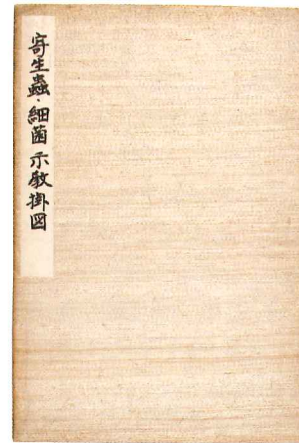
● 樺太物産標本(学術標本図書出版土屋商店製)
 学習院初等科蔵



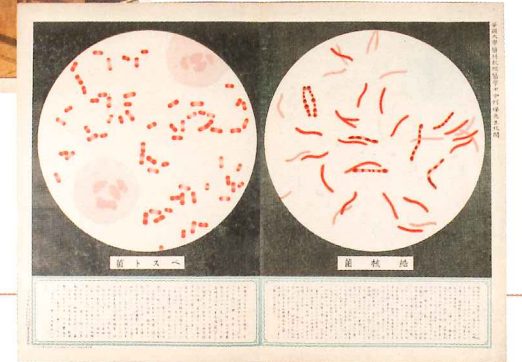
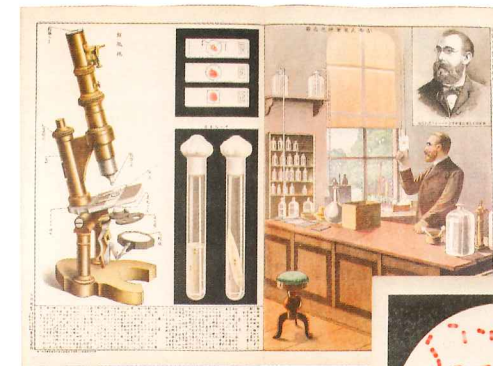
● 樺太物産標本(学術標本図書出版土屋商店製)
 学習院初等科蔵



● 外国物産標本 亜細亞洲(島津製作所製)
 学習院初等科蔵



● 寄生蟲・細菌示教掛図(東京造画館発行)
 明治～大正期
 学習院初等科蔵



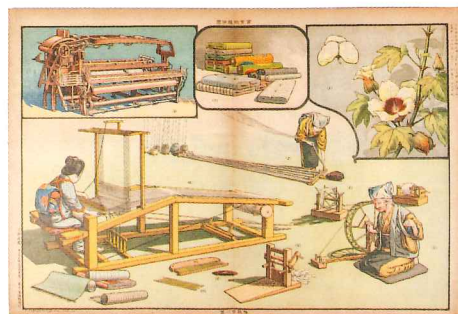
● 外国物産標本 亜細亞洲(島津製作所製)
 学習院初等科蔵



● 渾天儀(大野規周製)
 明治7年10月 学習院初等科蔵



● 鴨緑江附近木材標本
 学習院初等科蔵



● 実業示教掛図(東京造画館発行)
 明治～大正期
 学習院初等科蔵



● 織物種類標本
 昭和初期
 学習院初等科蔵



● 模型白地図(平田義温使用)中部地方、アジヤ州
 学海指針社発行 大正9年
 学習院大学史料館蔵 三島家資料



● 金襴見本
 学習院初等科蔵

2 試験・成績・評価



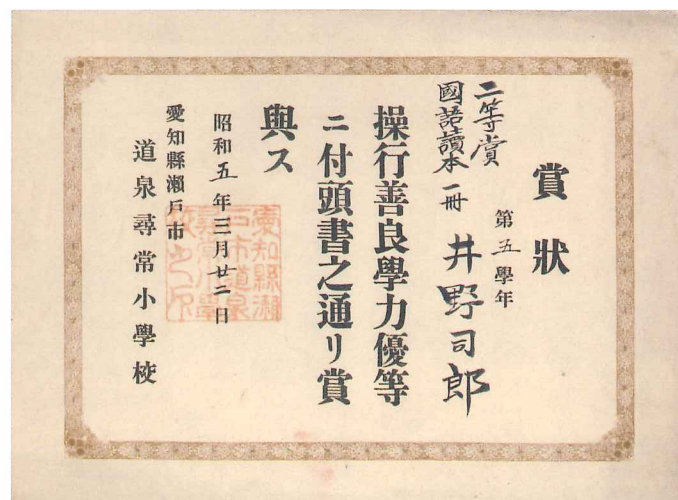
学年	科目	成績	評定	備考
第一学年	国語	...	...	...
第二学年	算術	...	...	...
第三学年	理科	...	...	...
第四学年	社会	...	...	...
第五学年	英語	...	...	...
第六学年	音楽	...	...	...
第七学年	美術	...	...	...
第八学年	体育	...	...	...
第九学年	衛生	...	...	...
第十学年	職業	...	...	...

● 東京府豊島師範学校附属小学校通信簿
明治44年度
学習院大学史料館寄託 松室重剛関係資料

● 海西郡彌富尋常高等小学校通知表
明治45年度
学習院大学教職課程研究室蔵

学年	科目	成績	評定	備考
第一学年	国語	...	...	...
第二学年	算術	...	...	...
第三学年	理科	...	...	...
第四学年	社会	...	...	...
第五学年	英語	...	...	...
第六学年	音楽	...	...	...
第七学年	美術	...	...	...
第八学年	体育	...	...	...
第九学年	衛生	...	...	...
第十学年	職業	...	...	...

● 愛知県瀬戸市道泉尋常小学校賞状
昭和5年3月22日
学習院大学教職課程研究室蔵



操行
戦前期の学籍簿や通知書には「操行」という評価項目が見られる。「操行」とは、生徒の品性・行為または生徒の道徳的判断・情操・行為・習慣などの総称で、しつけ・訓育の評価として、学業成績とならんで重視された。小学校では、明治33年(1900)の小学校令のもとで、制度的に定式化して評価することになり、「平素ノ成績」の一部分としての役割を果たした。一方、中学校では、全国一律の法令で根拠づけられてはいないものの、操行が、懲罰処分や進級の要件としても重視されていた。(歌川光一)

近代日本の公教育の特徴の一つとして「成績」「評価」とそれに至る「試験」の重視が挙げられるが、その源流も明治期の近代教育の成立に深く関わっている。

明治5年(1872)の「学制」では生徒の学習の進度に合わせた等級制を採用して試験制度を規定し、一級ごとに必ず試験を行い、合格者のみが進級できる制度を定めた。その方針の下、各府県は実体的に進級・卒業認定の試験(進級試験・月次試験・卒業試験・臨時試験)と高成績を競わせる試験(比較試験・巡回試験)をおこなった。中でも小学校から中学校、中学校から大学へ進む際の「大試験」は卒業試験も兼ね、当時の学校において重大な意味を持っていた。

明治12年の「教育令」では試験の内容や方法も文部省が監督することが規定され、全国一律の試験が実施されるようになったが、ほぼ毎月行われる試験は時には4割近くの落第者を出したり、落第による自殺者を生むなど、様々の問題を引き起こすことともなった。

その対策として明治23年の「教育勅語」及び翌年の「小学校教則大綱」では徳育主義がとられ、同33年には「小学校令施行規則」によって小学校の卒業は「平素ノ成績」によるものとされ、評価のスタイルに変更が為されたが、その一方で中学校以上の学校では試験と成績の重視は存続していくこととなった。(茂木謙之介)



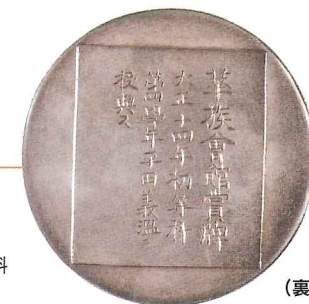
● 学習院初等科褒状(平田義温)
大正14年3月31日
学習院大学史料館蔵 三島家資料



● 華族会館褒状(平田義温)
大正14年3月31日
学習院大学史料館蔵 三島家資料



(表)



(裏)

● 華族会館賞牌(平田義温)
大正14年
学習院大学史料館蔵 三島家資料

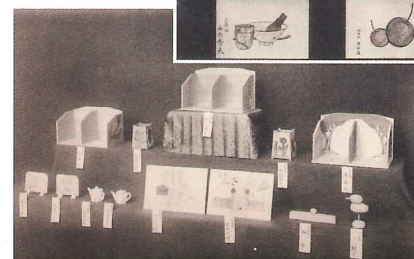
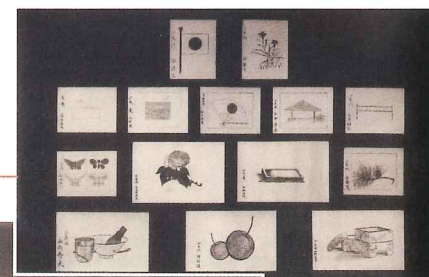
宿題

宿題は、「即題」「席題」の反対語で、「前もって与えておく問題」「そのときに決まらないで後に残された問題」を指す。その起源は定かではないが、明治後期には復習・復読が「おさらひ」と読まれている。さらに、大正末期から昭和初期になると、その「おさらひ」が、教師から課されるようになったことによって、今日でいう宿題が一般化したと考えられる。谷崎潤一郎『蓼食ふ虫』(昭和4年(1929))には「行きたいことは行きたいんだけど、まだ宿題がやってないしなあ」という文例が見られる。(歌川光一)



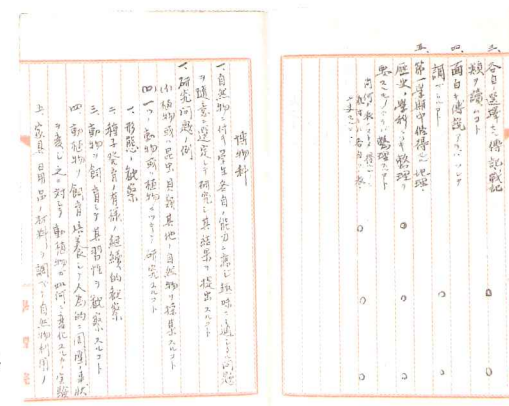
● 4年北組平田義温 夏休宿題
6年東組平田義温 富士山の研究
大正13年、大正15年
学習院大学史料館蔵 三島家資料

● 図画成績・手工成績(初等学科)
(『大礼奉献学習院写真』より)
大正4年
学習院大学史料館蔵



● 宣仁親王手工本立
大正4年
学習院大学史料館蔵 高松宮家資料

● 大正十一年度 夏休宿題 初等科
大正11年
学習院初等科蔵



落 磨 建

東京府青梅町への学習院初等学科遠足写真 日向和田石灰山
大正2年5月
学習院大学史料館蔵



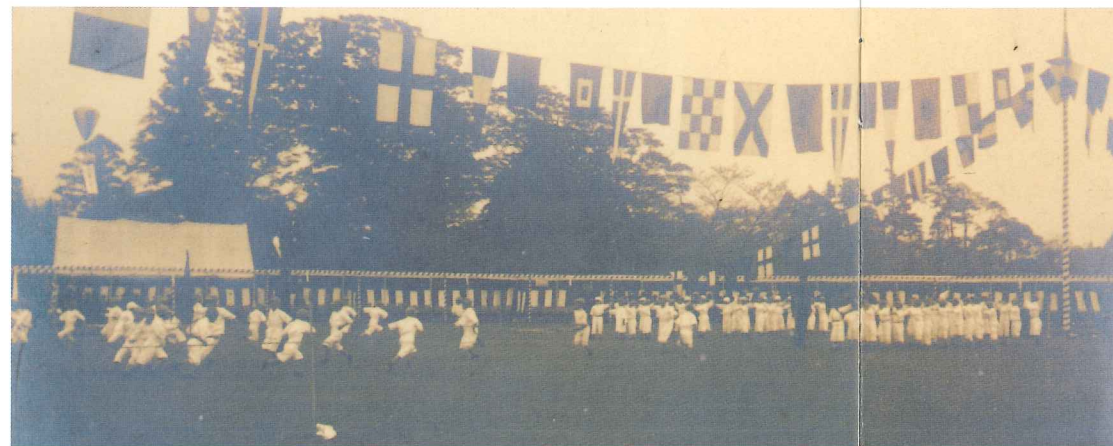
運動会 日本における運動会は、明治7年(1874)に海軍兵学寮から始まるとされているが、当時の運動会は現在イメージされる運動会とは異なるものであった。初期の運動会では、軍事演習的な色合いを帯びていたり遠足を兼ねていたりするものもあったが、徐々に競争を目的とする競技が増加してきた。競争には賞品を出す場合があり、メダルはそのうちのひとつであったと考えられる。

近代日本の学校において、入学式や卒業式、運動会、遠足、修学旅行、学芸会などの行事は、明治20年代から30年代頃にかけて徐々に形づくられていった。これらの各種行事が果たす役割に最初に着目したのは、初代文部大臣の森有^{あり}礼(1847～89)である。森は従来の「教場内ノ教育」に加えて、「教場外ノ教育」を重視し、明治24年(1891)の「小学校祝日大祭日儀式規定」の制定や、兵式体操の積極的な導入、運動会の開催の奨励などを行なった。

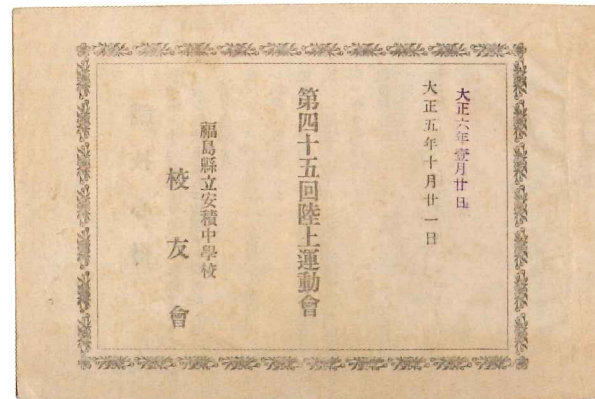
このような行事の中には、その成立当初は、現代の私たちが抱いているイメージとは異なる要素を持っていたものも少なくない。たとえば、初期の遠足は、校庭が設置されていない状況で運動会を実施するために、校外の河原や神社の境内などへ集団で移動した際の、往復の歩行のことを指していた。また、運動会が多く地域で村の「祭り」として受容されたように、これらの行事は学校内の教育活動としてのみならず、地域社会と学校とをつなぐ機能をも果たしていた。そして、大正期以降には、展覧会や唱歌会、夏休み中の林間学校などが加わったことで、学校行事はさらに多様化し、一年の節目節目を彩る重要な役目を担うようになっていく。

本章では、以上のような行事の中でも比較的初期に成立した、遠足と運動会を取り上げながら、近代日本における学校行事の姿に迫っていくことにしたい。(古仲素子)

●
學習院初等學科運動會寫真
大正2年10月19日
學習院大學史料館藏 高松宮家資料



● 福島県立安積中学校校友会 陸上運動会プログラム
大正5年10月21日
学習院大学教職課程研究室蔵



卷之四 半 三	正 技 順 序	四 鼓 會 操 領 領 領 領	第四回 二百米競走 三年	第四回 全	第四回 全	第四回 全	第四回 全	第四回 全	第四回 全	第四回 全	第四回 全	第四回 全	第四回 全	第四回 全	第四回 全	第四回 全	第四回 全	第四回 全	第四回 全	第四回 全	第四回 全	第四回 全
		第四回 抽籤競走	第四回 一分間競走	第三回 全	第三回 數轉競走	第三回 全	第三回 全	第三回 二百米競走	第三回 全	第三回 全	第三回 全	第三回 全	第三回 全	第三回 三本足競走	第三回 三本足競走	第三回 三本足競走	第三回 三本足競走	第三回 三本足競走	第三回 三本足競走	第三回 三本足競走	第三回 三本足競走	第三回 三本足競走

メダル

競技会や試験などで優秀な成績を収めた者には褒賞としてメダルが贈られるという風習がある。努力した結果をメダルという形で表彰されるという事は、今も昔も変わらず大変な名誉である。日本では明治5年(1872)に大阪造幣局内部の技術者養成学校の優秀卒業生にメダルが授与されたのが最初だと言われている。学習院では同13年に初めて試験の成績優秀者にメダルが与えられた。以降、運動会などの行事でも用いられるようになる。

当初メダルは江戸時代から金属の装飾品を作っていた鋳師^{かぎりし}たちが、一品一品熟練した技術によって製作していたが、明治10年代になると、機械での量産が主流になっていく。この様々な形のメダルが日本中で作られるようになるが、それぞれ裏面に刻まれた獲得者の名前からは、当初と変わらないメダルに込められた賛美の気持ちと存在の重みを感じられる。(橋本佐保)



(表)



(裏)

學習院初等学科運動會一等賞牌
大正 6 年
學習院大學史料館藏 高松宮家資料



●
學習院初等科運動會徒競走二等賞牌
大正13年10月13日
學習院大學史料館藏 三島家資料



(表)



(裏)

● 学習院初等科運動会賞牌
昭和 8 年
学習院大学史料館蔵 学習院関係資料

校友会雑誌

〔学校文化の豊かさ〕

校友会とは、旧制中学校、実業学校、高等女学校、高等学校、専門学校など、戦前の中等教育、高等教育段階の学校に設けられた会で、昭和16年(1941)には学校報国団に改組された。校友会のもとに、運動部、文化部の各種の部活動が置かれていた。校友会の会長は校長、各部の部長は教員が務め、その下の委員として生徒は活動していた。日本全国ほとんどの学校で校友会雑誌を刊行していたようで、早い学校では明治20年代に創刊している。

校友会雑誌は、雑誌部・文芸部といった部が編集を担い、学校によっては生徒が編集に携わり、原稿の取捨選択も行っていた。原稿は、生徒や卒業生からの投稿や、教員の寄稿が主である。宮澤賢治や芥川龍之介が中学生のころに投稿していたように、文学者の初期の作品が掲載されることもあり、文学的価値も高い。

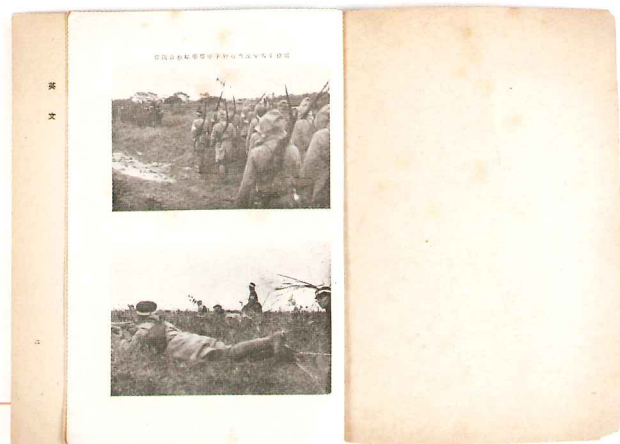
内容は、論説、文芸(小説、随想、詩歌)、研究の記事、講演の記録、部活動の記事、修学旅行や運動会の記録、学校日誌、卒業生からの便り、学校の身近な話題や笑い話など多岐にわたる。文章だけでなく、絵や写真、書なども掲載されることもある。表紙を通覧するだけでも各学校の個性や時代背景を窺うことができる。

明治期には年に6回以上刊行する学校もあったが、年1、2回発行が主流だった。生徒や教員、卒業生に配布するだけでなく、他の学校に寄贈もしていた。

現在でも、学校の歴史を残すものとして、高校や同窓会が大切に保存しているところも多い。(市山雅美)



● 卒業生写真(東京府立第一高等女学校校友会編「創立第二十五周年記念 校友会誌」より)
大正2年10月13日発行
学習院大学教職課程研究室蔵

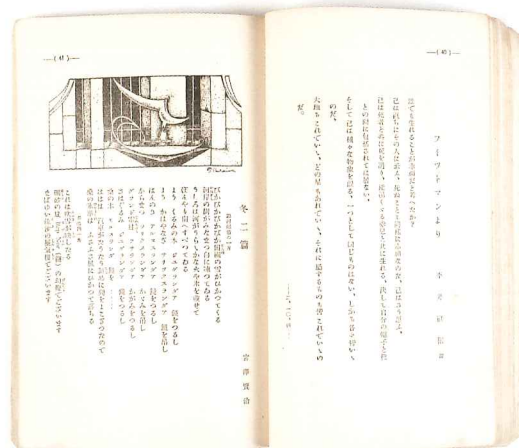


● 昭和十六年度東京府下中等学校総合演習写真(東京府立第一中学校報告団「學友」第一号より)
昭和16年12月25日発行
学習院大学教職課程研究室蔵



● 校友会雑誌
明治20年代～昭和前期
学習院大学教職課程研究室蔵

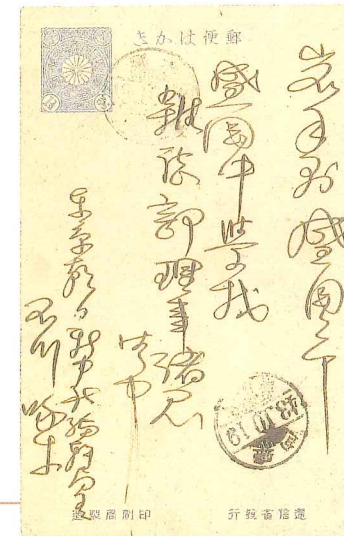
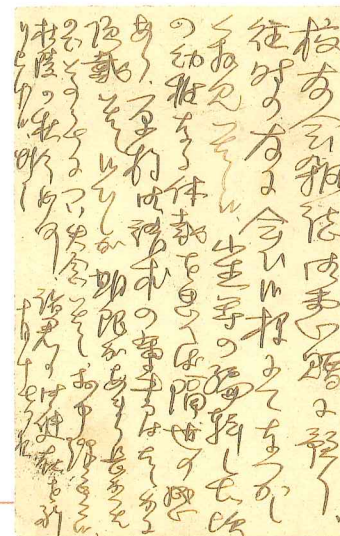
● 宮澤賢治「冬二篇」(岩手県立盛岡中学校校友会誌部「校友会雑誌」より)
昭和2年12月21日発行
学習院大学教職課程研究室蔵



石川啄木と『校友会雑誌』

啄木が、母校盛岡中学校の校友会雑誌部に宛てた葉書である。明治43年(1910)

10月18日の消印が捺されている。文面には、『校友会雑誌』を見て「往時の友に会ひ候様にてなつかし」という気持ちと、彼自身中学校時代に『校友会雑誌』の編集に携わったことが記されている。啄木は、同誌に「白蘋」という雅号も用いて、短歌や創作等を6度も寄稿し、その中には「林中書」等の文学史上の著名な評論も含まれている。啄木にとって、『校友会雑誌』が重要な意味を持っていたことがうかがえる。(斉藤利彦)



● 石川啄木書簡 盛岡中学校雑誌部理事諸君宛て
明治43年10月17日
盛岡てがみ館蔵

校友会雑誌御惠贈に預り、
往時の友に会ひ候様にてなつかし
く拝見いたし候、小生等の編輯した頃
の幼稚なる体裁を思へば隔世の感
あり、原稿御請求の葉書はたしかに
頂戴いたし候ひしが期限があまり長かつた
のでそのうちについて失念いたし、お申譯無之候
杜陵の秋今如何 諸君の御健在を祈
り上げ候、
十月十七日夜

岩手県盛岡市
盛岡中学校
雑誌部理事諸君
御中
東京朝日新聞社編輯室
石川啄木



年（西暦）教育史関連事項

弘化 4 （1847）	
明治 4 （1871）	・文部省が設置される
明治 5 （1872）	・「学制」が公布される
明治 9 （1876）	
明治10 （1877）	
明治12 （1879）	・「学制」が廃止され、「教育令」が公布される
明治13 （1880）	・「教育令」が改正される
明治17 （1884）	
明治18 （1885）	
明治19 （1886）	・「小学校令」「中学校令」が公布される。教科書の検定制度が発足する
明治22 （1889）	
明治23 （1890）	・「教育二関スル勅語」（教育勅語）が発布される
明治24 （1891）	・「小学校教則大綱」が制定される。地理では地球儀・地図・写真、理科では標本・模型・図画を使用することが示される
明治27 （1894）	
明治28 （1895）	
明治32 （1899）	・「高等女学校令」が公布され、全国の都道府県に高等女学校を設置することが義務づけられる
明治33 （1900）	・小学校令改正（第三次）により義務教育の無償、四年間の義務教育制度が確立する
明治35 （1902）	・教科書発行者と行政関係者の双方が摘発検挙される教科書疑獄事件が起きる
明治36 （1903）	・教科書が国定化される
明治39 （1906）	
明治40 （1907）	・「小学校令」が改正され、尋常小学校の修業年限が6年に延長され、義務教育年限が6年となる
明治41 （1908）	
明治43 （1910）	・第二期国定教科書の使用を開始
明治45 （1912）	
大正 1 （1912）	
大正 3 （1914）	
大正 7 （1918）	・第三期国定教科書の使用を開始
大正 8 （1919）	・「小学校令」「中学校令」を改正
大正 9 （1920）	・「高等女学校令」が改正され、高等科・専攻科が設置される。高等女学校の五年制が認められる
大正12 （1923）	
大正15 （1926）	・文部省訓令により「学校体操教授要目」が改正される
昭和 3 （1928）	
昭和10 （1935）	・「青年学校令」が公布される
昭和11 （1936）	
昭和14 （1939）	
昭和15 （1940）	
昭和16 （1941）	・「国民学校令」が公布される ・「中等学校等二於ケル修練組織二関スル件」が出され、校友会が学校報国団に改組される
昭和18 （1943）	・「中等学校令」を公布。それまで中学校・高等女学校・実業学校と呼ばれていた各学校が「中等学校」として統一される
昭和19 （1944）	・「学徒勤労令」を公布
昭和20 （1945）	・「戦時教育令」を公布

※本年表は参考文献をもとに瀬川大・嵯峨景子・保坂克洋が作成した。

吉良俣「明治の視覚文化と教育―掛図の変遷―」『熊本大学教育学部紀要』第16号　熊本大学教育学部、1968年
日本近代教育史事典編集委員会『日本近代教育史事典』平凡社、1971年
山田昇「操行」日本近代教育史事典編集委員会編『日本近代教育史事典』平凡社、1971年、341頁
深谷昌志「中等教育」国立教育研究所『日本近代教育百年史 第4巻』1974年、1039-1195頁
藤田昌志「学校行事」細谷俊夫ほか編『教育学大辞典 第1巻』第一法規出版、1978年、382-384頁
横須賀薫・水原克敏「宿題」細谷俊夫ほか編『教育学大事典 第3巻』第一法規出版、1978年、343-344頁
学校法人学習院編『学習院の百年』学校法人学習院、1978年
片岡徳雄「教科書」細谷俊夫ほか編『教育学大事典 第2巻』第一法規出版、1978年、298-302頁
平沢茂「明治初期小学校における掛図利用教育の意義」『亜細亜大学教養部紀要』第29号　亜細亜大学　1984年
天野郁夫「試験と学歴―努力信仰を超えて―」リクルート、1986年
石附実編著『近代日本の学校文化誌』思文閣出版、1992年

学習院関連事項

・京都に公家の教育施設である学習所を設立(学習院の起源)　～ 1868

・華族会館において建学の議起こる
・東京府神田錦町にて学習院開業、当初は男女の生徒を教育

・隅田川の両国の中洲で游泳(学習院の游泳の濫觴)、游泳場は1891年に江の島、1912年に静岡県駿東郡楊原村(現沼津市)へ移る
・男子に海軍士官型の制服着用実施、日本初の学校生徒の制服
・宮内省所管の官立学校となる、軍事教育を重視し「武科」を設置
・東京府四谷区尾張町に華族女学校を創設、これに伴い学習院の女子教科廃止
・学習院で兵士用背嚢を通学鞆(ランドセル)として用い始める

・輔仁会(校友会)発足、翌年より『輔仁会雑誌』発行
・華族女学校、麹町区永田町に移転
・学習院学則制定、初等学科、中等学科、高等学科、別科(のち大学科、1905年廃止)、海軍予科(1899年廃止)の5種となる

・華族女学校に付属して幼稚園を設置
・華族女学校の同窓会組織である常磐会創設。1900年より『常磐会会報』、1910年より会誌『ふかみどり』発行

・華族女学校を学習院に併合し、学習院女学部とする

・学習院、東京府下高田村(現在の目白校地)に移転、中等学科・高等学科生は全寮制
・卒業生武者小路実篤、志賀直哉、有島武郎らが雑誌『白樺』発行、『輔仁会雑誌』に影響を与える
・卒業生三島弥彦が第5回オリンピック(ストックホルム)に陸上競技短距離代表として参加
・乃木希典学習院長、自決
・夏目漱石、輔仁会にて「私の個人主義」講演
・学習院女学部、青山に移転、女子学習院となる。本科の制、二重学年制など独特の教育制度
・初等学科・中等学科・高等学科を初等科・中等科・高等科に改称
・学習院同窓会を改組し校友会として発足、翌年から『校友会会報』発行
・中等科・高等科生の全寮制廃止
・関東大震災により校舎・教材類に多大な損害を被る
・学習院初等科生の作品集『小さくら』創刊
・学習院創立五十周年祝典举行(大正天皇の大喪のため1年延期して行う)
・史学会・理学会誕生、1935年ごろにかけて輔仁会に所属する部が増加
・女子学習院創立五十周年祝典举行
・中等科2年生は原則として全員少年寮に入寮とする
・輔仁会規則改正、運営に対する教職員の権限強化
・皇太子明仁(今上天皇)初等科入学

・学習院、女子学習院とも戦災により大半を焼失

謝辞

本展覧会の開催にあたり、次の方々からご協力を賜りました。篤く御礼申し上げます。（敬称略）

浦本伸一
岡田茂弘
桑尾光太郎
小西晃
西城恵一
柴崎勝利
渋谷梨穂
中山章
長谷川怜
三浦芳雄
三島昌子
山本伸夫

学校文化史研究会
学習院アーカイブズ
学習院初等科
学習院大学教職課程研究室
盛岡てがみ館

■執筆者一覧

(学習院大学史料館)	
学習院大学史料館助教	鎌田純子
学習院大学史料館学芸員	長佐古美奈子
学習院大学史料館PD共同研究員	橋本佐保

(学校文化史研究会)

学習院大学文学部教授・学習院大学文学部教育学科開設準備委員	斉藤利彦
湘南工科大学工学部　専任講師	市山雅美
東京大学大学院教育学研究科 博士課程 日本学術振興会特別研究員	稲井智義
東京大学大学院教育学研究科 博士課程 日本学術振興会特別研究員	歌川光一
東京大学大学院教育学研究科 博士課程	古仲素子
東京大学大学院学際情報学府 博士課程	嵯峨景子
日本女子体育大学体育学部　准教授	瀬川大
東京大学大学院教育学研究科 博士課程	堤ひろゆき
立教大学大学院文学研究科 博士課程前期課程	保坂克洋
東京大学大学院総合文化研究科 博士課程　日本学術振興会特別研究員	茂木謙之介

斉藤利彦『競争と管理の学校史―明治後期中学校教育の展開―』東京大学出版会、1995年
海後宗臣・仲新・寺崎昌男『教科書でみる近現代日本の教育』東京書籍、1999年
吉見俊哉ほか『運動会と日本近代』青弓社、1999年
学習院大学五十年史編纂委員会編『学習院大学五十年史』学習院大学、2000年
橋本毅彦、栗山茂久編『遅刻の誕生 近代日本における時間意識の形成』三元社、2001年
総務部広報課、総務部院史資料室、企画部企画調整課編『学習院125年 1877 ～ 2002』学校法人学習院、2002年
佐藤秀夫・寺崎昌男編『日本の教育課題 第5巻 学校行事を見直す』東京法令出版、2002年
佐藤秀夫『教育の文化史 第4巻 現代の視座』阿吽社、2005年
斉藤利彦、市山雅美『旧制中学校における校友会雑誌の研究』『東京大学大学院教育学研究科紀要』第48巻、2008年、435-461頁
斉藤利彦ほか『旧制中等諸学校の「校友会誌」にみる学校文化の諸相の研究と史料のデータベース化』、2011年